

妙法蓮華經の第二に云はく「若し人信ぜずして此の經を毀謗し、經を誦誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん。其の人命終して阿鼻獄に入らん。乃至是くの如く展轉して無数劫に至らん」と。第七に云はく「千劫阿鼻地獄に於てす」と。第三に云はく「三千塵点」と。第六に云はく「五百塵点劫」等云云。涅槃經に云はく「惡象の為に殺されては三惡に至らず、惡友の為に殺されては必ず三惡に至る」等云云。堅慧菩薩の宝性論に云はく「愚にして正法を信ぜず、邪見及び憍慢なるは過去の謗法の障りなり。不了義に執着し、供養恭敬に著し、唯邪法を見て善知識に遠離し、謗法の者に親近し、小乗の法に樂著す。是くの如き等の衆生大乘を信ぜず、故に諸仏の法を謗す。智者は應に怨家・蛇火毒・因陀羅・霹靂・刀杖・諸の惡獸・虎・狼・師子等を畏るべからず。彼は但能く命を断じて人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること能はず。應に畏るべきは深法を謗すると及び謗法の知識なり。決定して人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむ。惡知識に近づきて惡心にして仏の血を出だし、及び父母を殺害し、諸の聖人の命を断じ、和合僧を破壊し、及び諸の善根を断ずと雖も、念を正法に繫くるを以て能く彼の處を解脱せん。若し復余人有って甚深の法を誹謗せば、彼の人無量劫にも解脱を得べからず。若し人、衆生をして是くの如き法を覺信せしめば、彼は是我が父母、亦是善知識、彼の人には是智者なり。如来の滅後に邪見顛倒を廻らして正道に入らしむるを以ての故に、三宝清淨の信、菩提功德の業なり」等云云。竜樹菩薩の菩提資糧論に云はく「五無間の業を説きたまふ。乃至若し未解の深法に於て執著を起こせば彼の前の五無間等の罪を聚めて之に比するに百分にしても及ばず」云云。

夫賢人は安きに居て危ふきを欲ひ、佞人は危ふきに居て安きを欲ふ。大火は小水を畏怖し、大樹は小鳥に値つて枝を折らる。智者は恐怖すべし、大乘を謗する故に。天親菩薩は舌を切らんと云ひ、馬鳴菩薩は頭を刎ねんと願ひ、吉藏大師は身を肉橋と爲し、玄奘三蔵は此を靈地に占ひ、不空三蔵は疑ひを天竺に決し、伝教大師は此を異域に求む。皆上に挙ぐる所は經論を守護する故か。

今日本国の八宗並びに淨土・禪宗等の四衆、上は主上・上皇より、下は臣下・万民に至るまで、皆一人も無く弘法・慈覺・智証の三大師の末孫の檀越なり。円仁慈覺大師云はく「故に彼と異なり」と。円珍智証大師云はく「華嚴・法華を大日經に望むれば戲論

と為<sup>な</sup>作<sup>な</sup>す」と。空海弘法大師云はく「後に望むれば戯論と作<sup>な</sup>す」等云云。此の三大師の意は法華經は已今<sup>いこんとう</sup>當の諸經の中の第一なり。然りと雖も大日經に相對すれば戯論の法なり等云云。此の義、心有らん人信を取るべきや不<sup>いな</sup>や。今日本国の諸人、惡象・惡馬・惡牛・惡<sup>く</sup>狗・毒<sup>せき</sup>蛇・惡<sup>けんがん</sup>刺・懸<sup>けんがい</sup>岸・險崖・暴<sup>く</sup>水・惡人・惡国・惡城・惡舍・惡妻・惡子・惡所從等よりも此等に超過し、恐怖すべきこと百千万億倍なるは持戒邪見の高僧等なり。問うて云はく、上に挙ぐる所の三大師を謗法と疑ふか。叡山第二<sup>えんちようじゃっこう</sup>円澄寂光大師・別<sup>べっとうこうじょう</sup>當光定大師・安<sup>あん</sup>慧<sup>ね</sup>大樂大師・慧<sup>えりょう</sup>亮和尚・安<sup>あんねん</sup>然和上・淨<sup>じようかんそうず</sup>觀僧都・檀<sup>だんな</sup>那僧上・慧<sup>えしん</sup>心先德、此等の数百人、弘法の御弟子<sup>じつえ</sup>実<sup>しんぜい</sup>慧・真<sup>しんが</sup>濟・真雅等の数百人、並びに八宗・十宗等の大師先德、日と日と、月と月と、星と星と並び出でたるが如く既に四百余年<sup>きようりやく</sup>を経<sup>い</sup>歴<sup>か</sup>す。此等の人々、一人として此の義を疑はず。汝何なる智を以て之を難<sup>いか</sup>ずるや云云。

此等の意を以て之を案<sup>いとま</sup>ずるに、我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇<sup>いとま</sup>を止めて之を案<sup>いとま</sup>ぜよ。一生空しく過<sup>く</sup>ごして万歳<sup>なか</sup>悔<sup>なか</sup>ゆること勿<sup>なか</sup>れ。恐々謹言。

八月廿三日

日 蓮 花 押

富 木 殿

鷺<sup>ゆい</sup>目一結給<sup>おわ</sup>び候<sup>おわ</sup>ひ了<sup>おわ</sup>んぬ。

志有らん諸人は一<sup>じゅじゅう</sup>処に聚<sup>じゅじゅう</sup>集<sup>じゅじゅう</sup>して御聽聞有るべきか。